
黒神いるかの転生生活

akane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒神いるかの転生生活

【Nコード】

N0860V

【作者名】

akane

【あらすじ】

めだかボックスの世界に、しかも主人公の双子の姉として転生した黒神いるか。

心配性な姉と変態な兄、そして過保護な妹に囲まれ育ったいるかが異常に過負荷に悪平等に特別に普通に学校生活を謳歌していく。

これはそんな物語。

序章（前書き）

前の小説が気に入らなくて消しました a k a n e です。

反省も後悔もせずに新しく連載を始めました。

めだかボックスの二次創作小説始まります。

序章

俺は、昔からツイてなかった。

母親は俺を生んで直ぐに死んだ。

それでも一心に俺を愛してくれた父親も、リストラされ絶望の中首を吊った。

叔母夫婦のところに引き取られたら、暴力暴言の雨霰。

好きだった女の子は同性愛者だった。

こんなにツイてない俺でも顔は結構整ってる方だから、女の子にはまあまあモテた。
結構告白とかされてたんだぜ？

けど、

「これで貴方は私のものよ……！」

流石にこれは予想してなかった。

パチッ

あれ？

俺はストーカーに殺されたんじゃない……。

『あう』

へ？

『あゝ……だっ！』

何で喋れないんだ？

何で手がこんなに小さいんだ？

何で足が短くなってるんだ？

何で首が据わってないんだ？

何で隣に赤ん坊がいるんだ？

『うえっ……おぎゃあああ！！』

何なんだ一体！

設定

黒神いるか（ ）

黒神めだかの双子の姉であり、転生者。

箱庭学園一年十三組。

十三組の十三人の補佐役であり、次期候補生。

黒神めだかと双子でありながらも、容姿的にはあまり似てない。

類似しているのは、髪の色と異常さだけであり、体格的にはむしろ不知火半袖や人吉瞳に近い。

ありとあらゆる境界を操るスキル「ノット・モノクロ」を所要する。

過保護な妹や変態の兄をどうにかしようと常日頃解決策を考えている。

同性愛者じゃないのに、同性にモテるのが最近の悩み。

唯一の癒しは人吉善吉らしい。

第一箱（前書き）

夏休みだから更新頑張るぞー

第一箱

「いるか姉」

『あうー？』

俺は転生とやらをしたらしい。

しかもめだかボックスの主人公、黒神めだかの兄妹という立ち位置に、だ。

いや、それは良いでしょう。

何で双子の“姉”なんだよ！

元とは言え、男だぞ俺は！

「だから、……って、聞いているのか？」

『んみゅ』

あつ、聞いてなかった。

原作はちょっと友人から聞いたくらいで全く知らない俺だが、この主人公が凄いという話だと言うことは知っている。

現に、まだ一歳なのにこんな流暢に言葉を話している我が妹。三歳の兄と二歳の姉の二人より身長が高い。

凄まじいと言うか恐ろしい成長の早さである。

ちなみに、そう言う俺は普通だ。
身長は赤ん坊の平均身長と同じ　それ以下だし。
まだ、言葉もマトモに話せない。

まあ、前世の知識と記憶がある以外は至って普通の一歳児だ。

「……私は一体何のために生まれて来たのだろうか」

『あだっ』

……そんなこと、普通の一歳児に聞くなよ。

これから大丈夫なのか、我が妹よ。

俺は小さく溜め息を吐いた。

そして、前ページから更に一年が経った。

早いだろう？でも、二歳までに大したイベントが無いんだよ、仕方ない。

『姉ちゃ』

俺は三歳の姉、黒神くじらが閉じ籠っている部屋へ向かった。
姉ちゃんが何をしてても、それが姉ちゃんの意味なら構わない。
けど、拷問みたいな生活を送る姉ちゃんに目も当てられなくなったのは事実だ。

「…何だ、お前かよ。何のようだ」

冷たくそう言う姉ちゃん。

思っただけど、この家の住人ってホントに濃いよな。

『お姉ちゃん、いっしょに遊ば』

ギュッと姉ちゃんの服の裾を引っ張る。

けど、その手は冷たくはね除けられてしまった。

「うるせえ！俺は不幸じゃなきゃ駄目なんだよ！」

『じゃ、じゃあ！私がお姉ちゃんを幸せにする！』

「ふざけたこと言っな！」

ふざけてなんかない！そう言って姉ちゃんに抱き着いた。

『お姉ちゃんは私のお姉ちゃんだもん！私が絶対に幸せにするんだもん！』

強くそう叫ぶ。

姉ちゃんの目を見つめると、姉ちゃんは居心地悪そうに目を逸らした。

『ちゃんとご飯食べなきゃダメ！遊ばなきゃダメ！もっと寝なきゃダメ！』

離せ！と姉ちゃん。

俺の手から離れようと暴れるが、意地でも離したりするもんか！

『私、お姉ちゃん大好きだから！お姉ちゃんが笑ってないと嫌だから！』

「……………」

『お姉ちゃん……………』

ポロポロと勝手に流れる涙。

いくら前世の知識があろうと、精神的にもやっぱり子どもなのだろうか、止めようとしても止まらない。

「……ケツ！俺はポリシーを曲げるつもりはねーよ」

『お姉ちゃ……………』

「けど、まあ……可愛い妹のお願いくらいは聞いてやらねえこともねえ！」

『！……………』

姉ちゃんのその言葉に止まらなかった涙が引つ込んだ。

「で、何だっけ？遊び？ほら、とつとと外行くぞ」

『……うん！……………』

黒神いるか、二歳。

どうやら姉の説得に成功しました。

第二箱（前書き）

書子ちゃん可愛いよ書子ちゃん

ご指摘があつたので書き直してみました。
改めて考えると200ちよつとの内一個つてめだかちゃんに比べたらちよつと運が良い程度ですね

第二箱

俺と妹のめだかは初めてのお出掛けをすることになった。

お出掛け　　と言っても、買い物だとか旅行だとかではない。

俺達の異常を調べるため、病院へ行くのである。

めだかはともかく、俺はそんな目立つことしてないんだけどな。
妹のめだかがあまりにも異常だから、念のためなのだろうか。

「いるか姉」

ふと、隣に座っているめだかが俺を呼んだ。

周りを見ると、まあ見た目からして濃い、異常そうな奴ばかりだ。

『んー？』

「もしかしたら、私の生まれた理由が分かるかもしれない」

めだかは異常だ。

極めて健全に普通に育った俺とは正反対で、不健全に異常に非一般的に育った。

そんなめだかを大人達は気味悪がった。

勿論、家族の俺や姉ちゃん（兄ちゃん？俺に変態な兄はいない）は気味悪がることなく彼女といたが、それでもやはりめだかからす

ると世の中は下らなく見えただろう。

異常に育つためだかには、普通や特別が愚かに見えただろう。

『うん！きつと分かるよ！』

「『分からないよ』」

俺がめだかに言うの間髪入れずに、めだかとは反対側の隣から否定の言葉が掛かった。

『え？』

「『君も大人も的外れだよねえ』」

隣を見ると、そこには不気味な兎の人形を持った不気味な男の子。

待合室にいる他の患者とは違って、別に変なところはない。

けど、何かが不気味で気持ち悪かった。

「『人間は無意味に生まれて』『無関係に生きて』『無価値に死ぬに決まってるのにさ』」

『……』

「『世界には目標なんてなくて』『人生には目的なんかないんだから』」

そう言い残して、男の子は診察室に入ってしまった。

『……めだか？』

俺が声を掛けてもめだかは存在しない男の子の背中をずっと見つめていた。

まるで、その言葉に感銘を受けたかのように。

『めだ　「黒神いるかちゃん。二番診察室に入ってくださいーい」
あつ、はーい』

めだかが心配だったけど、呼ばれたからには行かなきゃいけない。
俺は言われた通り「2」と書かれた診察室に向かった。

「黒神いるかちゃんね。私は君の担当医になる人吉瞳！よろしくね
！」

診察室にいたのはどう見ても小学生くらいであろう女の子？女性？
だった。

『あの…私、どこが悪いんですか？』

一応、年齢は二歳なのでたどたどしく喋る。
子どものフリって結構疲れるんだぜ？

「…いや、まだ分からないわ」

というか、俺目立つことしてないじゃん。
俺が異常なわけないよな。

……まあ、良いや。適当に二歳児らしい受け答えしてりゃ、普通と
診断され　「ところにいるかちゃん。くじ引いてみない？」

瞳先生が指したのはよく福引とかで使われるガラガラと回して玉を出すあれ。
何の意図があるのか、先生を見つめても早く回すよう催促されただけだった。

金色が出ませんよーに…。

『えいつ』

ガラガラと音を立てて回すと、出たのは黒。

『うう……黒だ』

ラッキー！と心の中で叫びながら、一応ガツカリ（したフリを）しとく。

黒い玉を先生に『はいっ』と差し出すと先生は神妙な顔をしていた。

「……もう一回やってもらえるかしら、いるかちゃん」

『？ いいよー』

黒い玉をガラガラ（あれ正式名称何なんだろうな）の中に再度入れ直し、もう一回やり直す。

黒だった。

念のため、と言われてもう一回やり直す。
黒だった。

『…黒ばっかりだ』

「いるかちゃん」

『なーに？』

「そのくじね、黒は253個の内、一個しかないの」

空気が凍った気がした。

『…………え？』

「君は間違いなく異常よ」
アブノーマル

だ、騙されたー！

「君には妹のめだかちゃんと一緒に通院してもらっわ」

第三箱（前書き）

書子ちゃんスキー様がいて興奮します、 a k a n e です

第三箱

あれから、俺とめだかの通院生活が始まった。

同じような質問をされ同じような返答を返して同じような「異常。要通院」の診断をされる。

その繰り返しに俺達 基めだかの精神は参っていた。
参っていた、だと語弊があるな。

嫌気が差した、と言って良い。

ある日、いつもの様に待合室で自分の番が来るまで待っていると、めだかが「脱け出そう」と言って来た。

大人を絶望させたり失望させて来ためだかだけど、大人に盾を突いたのは初めてだ。

「おい！１２番と１３番 黒神いるかとめだかはどこに行った！？」

俺達が逃げ出したことで騒ぐ大人達。

大分大事になってしまった。

『ど、どうするの？』

「—先ずあそこに逃げよう」

そう言つてめだかが指差したのは託児室。

ほとぼりが冷めるまで、俺達はそこへ逃げ込んだ。

部屋にいたのは、男の子一人だった。

周りに色んな玩具があり、その内の一つなんだろう知恵の輪を力チヤ力チャといじっている男の子。

めだかは“挨拶”をしようとその子に声を掛けた。

「おい、何をそんな単純なパズルに手こずっておる？貸せ」

それ子どもの玩具奪っただけじゃね？

とはツツコまない。俺も空気を読むのさ。

『めだか……。これ出来ない』

その子に言われるままにパズルを全部解くめだかに、さっきからやつてるのに全然出来ないルービックキューブもついでにやつてもらった。

勿論、それもめだかは解いてしまった。

「すごいすごい！君はすつごくすごいや！」

『えへへ、めだかは凄いんだよー』

ピョンピョン跳ねて喜ぶ男の子にのろけとく。

「……凄くなんかない。それに凄くたって何にもならない。私が生きてることに、私が生まれたことに、何の意味もないのだから」

『もーっ、まだそんなこと言ってるのめだか!』

「えー? そうかなー? この世に意味の無いことなんてないと思うけど?」

と、男の子は首を傾けながら言った。

それでも溜め息混じりにつまらなさそうにめだかは言った。

「私は一体何のために生まれてきた?」と。

男の子は満面の笑みでめだかに返した。

「きつと君は、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ!」

これが俺達と、生涯の友人となる人吉善吉の最初の出会いである。

第四箱

『んー、箱庭学園ねえ…』

俺こと私（女の子らしくなるよう特訓中である）、黒神いるかが立つは箱庭学園理事長室。

あれから中学でもまあ色々あったけど俺 失礼、私とめだかは幼馴染みの善吉と共に同じ学園へ入学した。

ちなみに、めだかも私も一年十三組。

入学して早々に生徒会長になっためだかだけど、私は裏腹に授業にマトモに出席すらしてない。

元々、十三組には登校義務からないんだしね。

そんな訳で、今日も箱庭学園校舎を闊歩としっていると放送で理事長からお呼び出しが掛かったのである。

何だろ、私は基本何もしないからめだか関連かな？

そう色々と考えながら私は理事長室の扉を開けた。

「ふふ、そうかしこまらないで下さい」

『…えへへ、流石に理事長先生の前じゃ緊張しますよ』

……相変わらず食えない爺さんである。

そういえば、理事長って不知火と血縁関係にあるんだよね。
似てるところ、頭のアホ毛しかなくね？

「今回、いるかさん呼び出したのは少し実験に協力して頂きたくてですね」

お茶を啜りながら、頭のアホ毛を揺らす理事長。
どうなってんだろ、あれ。

『実験ですか？理事長先生の望む結果を私が出せるとは思えませんよ？』

「いえいえ、そう言わないで下さい」

ただの老人の戯れですから　と理事長が出したのはサイコロがいっぱい入ったグラス。
瞳先生のことを思い出すなー。

理事長に振るよう催促されてしまったので、適当に幾つか掴んで机の上に投げてみる。

ヒュッ

「これは……！」

おー。サイコロでピザの斜塔が出来た。

うん、ダイスの斜塔と名付けよう！

「（サイコロが角で立ち、更にその上に他のサイコロが積み重なる

など…重力的にあり得ませんよ！）……流石です、いるかさん。アナタは妹さんにも負けず劣らず異常です」
アブノーマル

『いえいえー、私がどれだけ頑張っても、どれだけ運が良くても、めだかには勝てませんよ』

めだかは異常とか普通とかそんなレベルじゃないからなーあの子。

「ところで、いるかさん。アナタにちょっと相談があるのですが…」
…」

『はい？』

第五箱（前書き）

33号のジャンプ買って来ました。

処理ちゃん可愛いよ処理ちゃん……ちがつ、浮気じゃないんだ書子ちゃん！

第五箱

「むっ、いるか姉ではないか。探したぞ」

「んっ、めだか。何か私に用事ー？」

理事長とのお話が終わってまた私が校舎内を散歩しているとめだかに遭遇。

相変わらずのワガママボディで羨ましいよ。

「いるか姉、生徒会役員になるつもりは 断る」…何故だ」

即答するとブスツとした表情でめだかは質問して来た。

結構誤解されがちだけど、めだかは「喜」だけでなくちゃんと「怒」「哀」「楽」も持つてるんだぜ？

「めだかのことから善吉も生徒会に入れるんでしょー？それで私まで入ったら独裁政治じゃん」

最もらしいことを並べるけど、ぶっちゃけ面倒なだけ。めだかは大好きだけど、騒動に巻き込まれるのは嫌いだからね。

「うむ…その通りだが」

「応援だけさせてよめだか」

ニツコリと笑っておく。

過保護というか妹バカというか、めだかは私に甘いから無理矢理生徒会に入れさせようとは思わないだろ。

「…分かった。生徒会には善吉に入って貰う」

『うん、頑張つてね!』

「その代わり!少し付き合ってもらつぞ!」

『え?』

ガシッ

え、ちょ、

『何処行くのさめだかー!』

「俺は絶対!生徒会には入らない!」

なるほど、善吉を誘い 基、誘拐しに来たのか。

にしても、善吉も素直じゃないなあ。

「…つたく、普通に連れてくるってことが出来ねーのかよ。生徒会
長さん」

『何言つてんの、善吉。めだかに“普通”なんて出来るわけないじ
ゃん!』

酷い言い分かもしれないけど、実際そうなんだよね。
何でも出来るめだかも“普通”な行動だけは絶対出来ないんだから。

「カツ！それもそうだな！」

「善吉もいるか姉も、そう冷たいことを言うな。そして、善吉。そうよそよそしい呼び方せずに昔のようにめだかちゃんと呼ぶが良い！」

凜っ！とめだか。

毎回思うんだけど、あの効果音どうやって出てるだろう。

「カツ！そりゃキツイのは分かるけどな！だからって俺を巻き込むなよ！」

何か善吉が言ってるけど、めだかは総スル！。

聞いているどころか、いつもの間にか脱いでるよ。

いつまで経ってもあの露出癖は直らないんだよなあ。

「少なくとも小六まで私達と一緒に風呂に入っていた男の言うことではないな」

「昔の話だ！」

『そ、そんなに認めたくない思い出なんだ……酷いよ、善吉』

おおよ、と泣く（フリする）私。

ちなみに、今でもたまーにめだかとは一緒に風呂入るぜ。姉妹だもの。

「…いるか姉を泣かせたな善吉？」

「お、おい！どう考えても泣き真似だろ今の！いるかちゃんも嘘だ
って言つて　ギヤアアアア！！」

南無阿弥陀仏、だよ善吉よ。
君の死は無駄にしない。

『そつえばさ、めだか。目安箱改めめだか箱、設置したんでしょ？』

「うむ、早速第一号の投書があつたぞ」

『見せて見せてー』

【拝啓　生徒会長様

実は三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っています。
どうか彼らを追い出してください。
よろしく願います】

『…剣道場？』

第六箱（前書き）

書子ちゃんに食べられたいよお

第六箱

『ふーん』

不良を追い出してくれ、の投書に従い剣道場にやって来た私とめだかと善吉（結局ついて来てるし）。

剣道場には、お世辞にも一般生徒とは言えない不良共が屯っていた。

『ひゃー、これは酷い有り様だね』

剣道場だと言うのに、剣道着を来てる奴なんか一人も見当たらない。この学校、私服登校は禁止だろ確か。

「あ？誰だアお前ら」

「一年十三組生徒会長執行部会長職黒神めだかだ」

『同じく一年十三組黒神いるかです』

自己紹介をしたところで、めだかが「目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！」と言い放った。

けども、まあやはりと言うべきかゲラゲラ笑い見下しながら挑発してくる不良組。

タバコ臭いから正直喋らないで欲しいよね。

『リセツシュ』

プシュッ

「んなっ！…て、てめえ！」

「…いるか姉、何をしておる」

『タバコの臭いをリセツシユしようかと』

タバコの臭いをプンプンさせて校舎歩いてたら風紀委員会に取り締まられちゃうからね。

厚意で掛けてあげたんだから感謝してくれよ？

「まあ確かに、タバコだけは控えておくが良い。貴様達の健全な成長を阻害するし、何より将来の楽しみが無くなるぞ！」

スツとめだかが扇子を広げたかと思ったら、その上には煙草が積み重なっていた。

無刀取りならぬ、無煙草取りってか？
いつの間に抜き取ったんだか。

まっ、そんな技とか術とかめだかにとっては人を助けるために必要な力の一つにしか過ぎないんだろうなあ。

「哀れなことだ。貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何か重大な理由があって挫折を経験し、道を踏み外してしまったとしか考えられん」

おお！出た、黒神めだかの真骨頂その？上から目線性善説！

数ある真骨頂の中じゃ、あんまり珍しいものでもないけどな。

「親に見捨てられたか？よき師に出会えなかったか？友に裏切られたか？安心しろ。私が貴様達を更生させてやる。剣のこと以外何も考えられないようにしてやる。矯正してやる強制してやる。改善してやる改造してやる。二度とだらけようなどと思えぬよう、泣いたり笑ったり出来なくしてやる。まずは素振り1000回からだ！貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

『めだかカツコイー』

『…ねえねえ、めだか』

「何だ、いるか姉」

『何をしてるのかな？』

「剣道場の掃除だ」

『いや、それは分かるんだけど……』

『何で私まで付き合わされてるのかなー？』

こんにちわ、皆お馴染みの黒神いるかだよ。

不知火と買い食いしてたら、我が妹めだかに拉致られてしまった。しかも何故か剣道場に。

曰く「連中が練習に励めるように」だとか。

……相変わらず、的外れのような得てる子だ。

『うあー、面倒だなあ』

ちよいちよいとスキル《ノットモノクロ》で汚いと綺麗の境界をいじってバレない程度に掃除をサボる。

めだかにバレたら「自らの手でやるからこそ意味があるのだ!」とか怒られちよいそうだしね!。

『とうかさ、めだか。依頼の内容は「不良を追い出せ」でしょ? 更生させたところで、依頼は解決出来くない?』

「…簡単な話だよ、いるか姉。連中が更生した時点で、不良などどこにも存在しないだろう」

『……なるほどね』

ホント、めだかは見てて飽きないや。

「な、何イイ!？」

『お、善吉来たんだ』

「遅いぞ善吉。稽古開始の時刻はとうに過ぎとおる。遅れた分、帰りが倍は遅くなると心得よ!」

『まーまー。善吉は一組だから大変なんだよ』

登校義務が無いから授業すら無い私等と違って、善吉はちゃんと授業受けてるんだから仕方ない仕方がない。

「しかし連中も遅いな。最近は時間にルーズな者ばかりだ」

ちゃんと叱ってやらんとな、と続けるめだか。

最近って言ったって私等も最近の若い者の内の1人だぜ？

「遅いも何も来るわけねーだろうが！道場掃除すりや連中が心開く
とでも思ったのか！？大体、お前何でここまでしてんだよ！あんな
連中、お前にとっちゃ見知らぬ他人だろ？」

おいおい、善吉。

愚問の中の愚問だよ、そんな言葉。

「私は見知らぬ他人の役に立つため生まれてきた」

……こんな言葉がめだかから出るようになったのも、善吉のおかげ
なんだけどなあ。

忘れてんのかな？

『あつ、善吉！』

あんだだけ批判してた不良組が道場に胴着姿で来たことで善吉は拗ね
てどっかに行ってしまった。

剣道なんかしたことないし、私が不良組に教えることなんて無いの
で善吉の後を追いかける。

うあー、善吉って結構足速いからなー。

『おっ、いたいた善き』

グシャアッ

『!!!』

「ったく…。ホント！アテにならねえ生徒会だよなあ。僕は追いつけなくて頼んだんだぜ？雑草育ててどうすんだよ、アホが！」

あれは確か善吉のクラスメイトの日向だっけ？ひねくれてるなあ。

『ちよつとー、私の幼馴染みイジメないでよー』

「お前：！あの化け物会長の！」

『そうそう、黒神めだかの双子の姉の黒神いるかですよー。ねえねえ、知ってる日向君？』

一寸先は闇って言葉。世の中は何が起こるか分からないって意味なんだってさ。

というより、日向君の場合は、

『目と鼻の先に闇の方が合ってるかな？』

「ギッ、ギヤアアアア！！！」

第七箱（前書き）

宿題めんどい！

書子ちゃんが可愛い過ぎて生きるのが辛い

第七箱

『結局生徒会入ってんじゃない!』

あの後、私は少し日向君と遊んだ。

日向君、剣道三倍段とか持つてるらしいけど体力無いんだねー、すぐ疲れて眠っちゃったよ。

勿論、保健室には連れてったさ。

赤さんめっちゃめっちゃ驚いてたけどな。

んでまあ生徒会室に来てみれば、あんだけ入らない入らない言ってた善吉が『庶務』の腕章を腕に巻いてるのだ。

最初からこうなるだろうなとは予想してたけどね。相変わらず、素直になれないんだから善吉は。

「おわっ!なんだいるかちゃんかよ…」

『何だとは失礼な。んで、善吉は何生徒会制服着て鏡の前で唸ってるの?』

端から見たら凄いわい変な人だぜ?

「いやさー、やっぱり俺に黒は似合わねえと思ってさあ」

だから制服白のこの学校来たのに……と善吉。

善吉からしたら学校の選ぶ基準は私やめだかがいるかないかより、

制服が白か黒かなのね！

「そついう訳じゃねえけどよ。うーん、やっぱりサマになんねえ」

『いやいや、結構似合ってるよ善吉君』

「うむ、善吉には黒が良く似合う」

「どうわっ!」

いつの間にか私達の背後に立ってためだか。

驚いてる善吉をスルーして、内側にジャージを着るといいと言った。いやいや、流石にそれはちょっと……。

「デッ、デビルかけえ!」

ええ……。中学の時から思ってたんだけど、善吉ってセンス悪いよなあ。

意にも介してないめだかと呆れてる私を余所に善吉は一人興奮してる。

「目安箱をチェックしてきたぞ」

『新しい投書でもあったの?』

「ああ。どつやら今回はきちんと記名しておるようだな」

「あの…ごめんなさい。本当はこんなこと、下級生のあなた達に相談するようないことじゃないかもしれないんだけど、剣道場のこととか友達から色々聞いて…」

ほうほう、陸上部の二年九組有明先輩ねえ。

「遠慮はいらん、構えるな。私は誰の相談でも受け付ける！」

「（何でこいつ上級生に敬語使わないんだろう…）」

「（何でこのコ、生徒会でも無いのにここにいるんだろう…）それで相談っていうのはこのことなんだけど……」

そう有明先輩が出したのはボロボロに切り刻まれたスパイクと、切り抜きで「陸上部やめろ」と書かれた紙。

『うわぁ』

イジメってのは陰湿だねえ。

特に女子のは見てるだけで泣けるぐらいだよ。

有明先輩曰く、今度の大会で短距離走の代表に選ばれたことが原因だとか。

『ってことは陸上部の3年の女子かなー？』

「え？」

『有明先輩がレギュラーに選ばれたのはこれが初めてなんですよね？だったら、前回までレギュラーだったのに有明先輩と入れ替わっ

て落ちてる人がいるはずじゃないですか。同級生からのただの妬みとかより、そっちの方が現実的であり得るんじゃないでしょーか」

「そ、そっか！じゃあ犯人は一氣に限られ」

「しかしだな、いるか姉。実質的な証拠はまだ何もないのだ。状況証拠だけで他人を悪人と決めつけるのは良くないぞ」

有明先輩の言葉を遮って私をたしなめたためだか。

そう言うと思ったよ。

「だ・か・ら、核心となる証拠を掴みに行くんでしょーが！」

めだかほどじゃないにしても、私だってイジメみたいな卑怯なことはあんまり好きじゃないんだぜ？

ちょーつとばかり、犯人には痛い目見てもらわなきゃね。

という訳で来るグラウンド。

不知火の情報網のおかげで、私達は簡単に容疑者を見つけることが出来たのである。

「んで、どうするんだよいるかちゃん。物的証拠なんか警察でもねーんだし集めようがねーだろ」

「ん？簡単だよそんなの」

「諫早三年生、貴様が犯人か？」

『めだかの手によっちゃね』

いやあ、まさか本人に直接聞きに行くとはねー。
姉である私もちよつと驚いたよ、うん。

「あ、逃げた！」

『逃げない方がおかしいけどね』

コ ナンの犯人でもあるまいし、バレた途端自供し始める人間なんていないでしょ。

『…うーん、走るの好きじゃないし、帰ろっかなあ』

「あつ、じゃあお嬢様ー。一緒に買い食いでも行きませんか？」

『おつ、良いねー。ミスド行こうよミスド』

この後不知火と仲良くミスドに行きましたとさ、ちゃんちゃん。

第八箱（前書き）

っしゃああおらあ！

更新してやったぜっしゃあ！

という訳で、第八箱更新しました。

明日は書子ちゃんと海に行くので、次の更新は明日の深夜か明後日になります。

第八箱

『子犬探し？』

めだかボックスこと目安箱を管理している善吉。

曰く今日の投書は三件らしい。

バスケット部室の普請要請と学食の新メニュー開発、そして子犬探し。

確かにめだかは何でも相談しろって言ったけど何でも屋じゃないんだよ生徒会はー？

まっ、生徒会役員でもない私が言えた身分じゃないかあ。

『はいはい！子犬探しは私がやる！』

「……では、学食の件は私が担当しよう。善吉はバスケット部の件を、いるか姉は子犬探しを頼む」

『オッケー、任せてよ！』

めだかは動物苦手だからね、子犬だろうと子猫だろうと向いてないだろ。

しかも、子犬って言ったって犬種はボルゾイ。

絶対成長してるだろうから善吉にはちよつと難しいね。

『　　』
　　と思って言い出したのにさあ……。何でいるかなあ？

「カツ！いるかちゃんにだけカツコイイ役させれっかよ！」

不知火と私と、そして善吉。

何で私が気を遣ってあげたのに来ちゃうかなあ。

「さあ、不知火！早く俺達を案内するんだ！その心当たりの場所とやらにな！」

「ああ……うん……いいんだけどね、別に。……そのテンションキモイな……」

不知火に引かれるって相当だよ善吉……。

正直、私もかなり引いてるぜ。

テンション高い善吉は死ぬ程ウザйнаあ。

「ちよつと前から学園内に住み着いてる犬がいるらしいってだけなんだけど。えーっと、確かこの辺に……」

不知火の案内に付いて行った先には秋月先輩の言っていた犬と模様が同じ“成犬”。

そりゃあ、去年の冬休みにはくれたんだもん。そうなるわなあ。

『大丈夫、善吉？無茶しなくても私がやるよ』

いくら獰猛とは言え、犬は犬だしね。

めだかみたいな化け物じゃあるまいし、やれないことはないでしょ。

「い、いや……！」

「へーえ。人吉君、帰るんだー？あんだけ強気なこと言つといて、女の子に全部任せてすこすこ帰っちゃうんだー？なっさけなーい」

『ちょ、ちよつと、不知火？』

「…あー分かったよ！行きゃー良いんだろ、行きゃー！」

不知火iiiiiiii！余計なこと言つなよおおおお！

「あつ、待つて人吉！」

余計なことしかしちゃった不知火は善吉を引き留めソーセージを差し出した。お昼御飯らしい。

お昼にソーセージ？

餌付けに使って！なんてキャラもしてないでしょ不知火は。

「これをお腹のトコに仕込んでね『ぎゃああ！内臓を食われたー！』と見せかけて実はソーセージでした』ってギャグやって欲しいの」

で・す・よ・ね。

正に外道やで不知火。

同じ人間とは思えないね！

「…クソツ。やっぱ俺がやるしかねえのか。とりあえず貸せ！」

そう言つて善吉はソーセージを奪い、それを左手に虫取網を右手に犬に向かつていった。

が、あえなく失敗。

勿論、さっき言つてたドツキリもガチで食われて……はないか。

「ああステキ！ステキ！人吉くんてば超ステキ」

パシャパシャと写メを撮る不知火。

『…不知火って本当に人間？』

「もっちろん！」

……人間って怖いなあ。

「えー、というわけでございまして。不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

「…なるほどな。しかし善吉よ、子犬探しの件はいるか姉に任せつつもりなのだが？」

『それがさー聞いてよめだか！善吉ったら自分が目立ちたいがために、私の仕事まで横取りするんだよー？』

まっ、私生徒会じゃないから仕事とか無いんだけどね、本来。けど、ほら、せっかくの厚意を無下にされるのは傷つくじゃん？

「ち、ちげえよ！あー…そんでだ。一年投書主の秋月先輩にも会ってみただけど、それがいかにも感じやすそうな娘さんでさ。とてもじゃねーが現状は報告出来なかったよ」

THE・お嬢様って風貌だったよね。

何にせよ、色んな人間がいる学校に冬休みとは言え、犬を連れて来ちゃマズイでしょ。

犬アレルギーの人だっているんだし。

『あの犬ボルゾイは狼狩りのための狩猟犬で、時速50kmを超えることもある犬の中でも俊敏な犬種だよ。本当ならかなり人懐っこい筈なんだけど…野生化して性格まで変わっちゃったみたいだね』

地球上で一番強い動物は犬って言われてるくらい犬は強いからね、普通《善吉》にはちょっとキツイ相手なんだよな。
なのにコイツは……まったく。

「カツ！どつりで手も足もでねーわけだよ。」

ソーセージ《内臓》は出たけどね。

「まあ、つつてもほつとくわけにはいかねーよな。このままじゃ保健所が動きかねーし」

「保健所？」

『うんうん。でもまつ！心配しないでよめだか。この件は私と善吉、不知火とで解決してあげるからさ』

「不知火と？」

「……やはりその件、私が動こう！」

『え』

『めだか、それってまさか…』

「うむ、演劇部から拝借してきた」

めだかが持ち出したのは犬の着ぐるみ。

確か演劇部が次の劇で使う予定の衣装である。

「さて、あやつがターゲットか」

めだかが横目でボルゾイを見る。

グルグル唸ってる犬を見てめだかは「可愛い」と言い放った。
素晴らしい感性だね！

早速、ターゲットに向かったためだかだけど、ボルゾイは「きゃいん！」と叫んでどこかに行ってしまった。

『あゝあ…』

「…逃げちまったな」

「ワンちゃん…ワンちゃん…」

凄いショックを受けてるめだかを善吉に任せ、私は犬を追いかけた。
面倒だけど、あの犬が人を襲う方が面倒になりそうだしね。

『…見つけ』

校舎裏の端の端。木陰に隠れてガタガタブルブルと震える犬。
どんだけ怖かったんだよ。

『キミをご主人様のところに連れてってあげるよ？さっきの怖い人から助けてあげるよ？だから、ほら。こっちおいで』

そう優あしく（ここ重要。 凄い大切だからね）声を掛けて、手を伸ばす。

すると、犬は仰向けになり尻尾を股の間に挟んでブルブルと震え始めた。

所謂、“降伏”。白旗の証拠である。

『…めだかの時は逃亡で、私の時は降伏か。 やれやれ、私達双子はどーも動物には好かれないみたいだ』

勿論、犬は飼い主のところへお渡ししました。

子犬の時より大人しくなったって先輩が不思議がってたけど、人間も犬も成長したら大人しくなるもんだよね

第九箱（前書き）

あわわ、ご主人様！

投稿出来ちゃいました！

はい、恋姫＋夢想なら星が大好き a k a n e です。

書子ちゃんと海行こうとしたら書子ちゃんに合う水着がなかったの
で、図書館デートになりました。

書子ちゃんがいたらどこでも私は幸せだよ書子ちゃん！

という訳で、出来た暇で作ってみた話です。

第九箱

『何かご用ですか理事長先生』

また呼び出しをくらった私。

理事長室には理事長が待つていて挨拶も早々にお茶を出された。

「いえいえ、いるかさんと少しお茶をしたいなと」

『はあ… まあ、それはいいんですが』

覗き見されるつてのはあまり良い気分がしないので、止めてもらっていいですか？

私がそう言つと、いきなり現れた“ように見える”七人の男女。全員面識はないが、その内の1人は入学したての私でも知ってる有名人だった。

雲仙冥利。10才という若さで二年十三組に所属する異端児。風紀委員長で、彼を敵にした時点で箱庭学園では生きていけないとまで言われてる。

『（なあんか随分と濃いメンバーだなあ）こちらは？』

「…十三組の十三人。サートイン・パーティー以前アナタにお伝えした“フラスコ計画”の実験体《協力者》ですよ」

『私のことを見るためだけに集まったっていう感じではなさそうで

すけど?』

理事長に聞く。

しかし答えたのは理事長ではなく、その後ろにいる七人の一人である男子生徒。

「君は実に聡明なんだね。 殺したくなる」

男子生徒はそう言うといきなり私に向かって銃を発砲した。
しかし、やはり、

『そんな簡単に死ねる程、 暗い人生送ってないんで 』

空間の境界（私はこれをスキマと呼んでる。移動やら収納やら發送やらに使えて結構便利）を作って弾を全部別の空間に送った。細かい場所指定はしてないけど大丈夫大丈夫。

「ふん。なかなかやる様だが、王を前に立ち続けるとは無礼にも程があるぞ。 跪け」

『お前が跪けよ』

「「「!?!?」」」

何だよ、この人。

先輩っぽいけど、自分のことを王とか腹筋死ぬわ。電波にも程があるだろおい。

命令されてもそれを守る義務は私には無いんで命令し返す。
理事長含めその場にいる全員が跪いた。

『 で、もう一回聞きますけど、この人達は何の用があつて覗き見してたんですか、理事長？ 』

「うぐ……あ、新しく十三人に入るアナタの品定めらしいですよ……
！それより、いるかさん……早く解放してくれませんか……ね？」

『 ん？ああ、もう良いですよ 』

すっかり忘れてた。

めだかと私って双子の癖に全然似てないけど、記憶力も大きな違いだね。

『 この後、不知火に学食奢る約束してるんですよ。用が済んだなら、帰っていいですか？ 』

財布家に忘れて来ちゃったからとりに戻らないといけないしね。
電波と同じ空間にいたら私まで電波になりそうなんで。

「 え、ええ…… 」

『 じゃあさようなら。理事長先生と先輩方 』

うーん。銀行で卸してきた方が良いかなあ。
不知火って容赦無いからなあ。

……そういえば、包帯で顔グルグル巻いてた女の人。どこか懐かしい感じがするんだけど、気のせいだったりするのかな？

「……どうですか、新しいお仲間は？」

「…僕の銃《僕らしさ》が全然効かなかった。彼女なら、僕の友達になってくれるかもしれない」

「俺はあの女の能力に興味があるな。銃弾を避けてねえのに、当たってない！異常中の異常としか説明がつかねえな」

「ケツ！妹の方が化け物かと思ったら姉貴の方が化け物じゃねえか！噂以上だぜ黒神いるか！」

「…黒神いるか、どっかで聞いた気がすんだよなあ」

「王土さんの『言葉の重み』を使ったことは凄いと思うし、私はああいう子嫌いじゃないよ」

「良いんじゃないかな？思考が読めないことは驚いたけど、あの子がいたら大分フラスコ計画も進むと思うよ」

「……」

「王土？」

「初めてだ、偉大なる俺が敗北するなど。初めて、負けた。……俺が王なら、アイツは神ということか……ふっ」

『へくちっ』

「あひゃひゃ、お嬢様風邪ー？」

『夏風邪かなあ』

「夏風邪はなんとかしかひかないって言うよね」

『……どういう意味かな？』

「あひゃひゃひゃ、何でもなーい！」

第十箱（前書き）

はい、難産でした。

どれだけ難産かと言うと、胎児が足から出てくるぐらいに難産でした。

私が唸ってた間にお気に入り登録が100件越しとるで！
ちよつと嬉し過ぎて阿波おどりしましたね。

しばらくしなかった更新ですけども頑張ったのでよかったです読んで
やってください。

第十箱

プルル…プルル…ガチャッ。

『はい、もしもし?』

「おー、いるかちゃん?久しぶりやね」

『…入学説明会以来ですかね、先輩。今日はどういったご用件で?』

「いやなに、キミの妹ちゃんに頼みたい事があつてなー。伝言を頼みたいんよ」

『めだかにですか?別に構いませんけど……頼みたいことって?』

「ククク!妹ちゃんにとつちや朝飯前つてとこやろな。我が部の後継者決めを手伝ってもらいたいんよ。簡単やろ?」

『まあ、めだかなら大丈夫でしょう。じゃあ伝えておきますね』

「ん。頼んだで」

『ええ、それじゃあまた放課後に。失礼します、猫美先輩』

プツッ。

……私、あの人に携帯の番号教えた記憶が無いんだけど、何で知ってるんだろう。

『柔道部の後継者決め、か。今回も私の出番は無さそうだな』

柔道部って言うと、アイツに会うことになるからなあ。

猫美先輩に挨拶だけして、帰ろう。

『と、言うわけだよ』

「それよりいるかちゃんは服を着ろ！」

善吉が着替え中に入って来るからいけないんじゃないか。
ノックは基本。親しき仲にも礼儀ありだぜ？

「というか、私はいるか姉が鍋島三年生と面識があることに驚いて
おる。いつ知り合ったのだ？」

『んー？去年の入学説明会にだよ。迷子になってたのを助けてもら
ったんだよね』

尊敬してるし信頼出来るけど、あの人卑怯だからなあ……。

反則王っていうか卑怯王っていうか。

毒盛ったりだとか事故起こさせたりだとかはしないんだよね、あの
人。

あくまで“努力”で潰したいからか、人道的な問題かは分からない
けど。

「まあ何にせよ、行ってみようではないか。柔道部といえば懐かし

い顔にも会えるだろうしな」

『…………』

だから、行きたくないんだよめだかよ……。

「やーやーようこそいらっしやいませ！ウチが差出人！柔道部部长の鍋島猫美でっす！本日はどーぞよろしく！」

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらうぞ」

柔道部を訪れた私達　正確にはめだかに話し掛けてきた猫美先輩。私も挨拶しておいた方が良いのかなこれ。

『お久しぶりです、猫美先輩』

「いるかちゃんもわざわざありがとなー。助かるで」

『いえいえー』

世間話？ではないな、めだかに今回の依頼について簡単に内容を話す猫美先輩。

しかし途中で思い出したかのように「挨拶したいゆー奴おんねん」と話を遮った。

『げっ…………』

呼ばれて更衣室から出てきた好青年（私にはキザ男にしか見えないけど）は善吉には目もくれず私とめだかのところに来た。来んなや。

「ご無沙汰しております、めだかさんいるかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にお気をわずらわせてはいけないと」以下略。話長いとにかく、好青年こと阿久根高貴は長い言葉をすらすら並べて私達の前に跪いた。目立つから止めて欲しいです。

「……堅苦しい真似はよせ阿久根二年生。他の者が見ておるぞ。貴様ほどの男がそのように振る舞っては示しがつくまい」

阿久根高貴の態度にざわめく他の柔道部員。

まあ、実力だけはあるだろうからね、実力だけは。

『……猫美せんぱい、もう帰って良いですか？』

めだかと阿久根高貴が話してる隙に猫美先輩のそこに行く。

私は嫌いで苦手不得意なんだよ、阿久根高貴が。

「ククク！ジブン、ホンマに阿久根くん嫌いやなー」

まだ帰っちゃ駄目や、と先輩。

うあー、この人が相手じゃなかったら早々に帰ってるんだけどなあ。

『そつえば、何でわざわざめだかに後継者決めなんか？外部者より部長の猫美先輩がやった方が良いんじゃないですか？』

何でも出来るめだかだけど、あくまで部外者。

本人は名前だけの部長だとか言ってるけど、内部者の猫美先輩より適任なわけじゃないよね。

「んー？いやなに、ちょっと欲しいモノがあつてなー」

『はぁ………？』

うーん、何が言いたいか分からないなあこの人は。

「まずは鑑定してやろう、貴様達の値打ちをな。我こそはと思う者から名乗り出よ。全員まとめて一人残らず！私が相手をしてやろう
！！」

『ん、始めましたね』

「ククツ！ナメられたもんやな！。我が栄光の柔道部も！」

『仕方ないですよ。姉の目から見ても、あの子と柔道でマトモに組めるのは猫美先輩と……認めたくないけど阿久根先輩くらいですから』

「いるかさんが俺のことを認めてくださった……！」

『うわ、いつの間に！』

気付かぬ内に隣に並んでいた阿久根高貴。

近いわ、ムサイわ、暑苦しいわ！

酷い言い様？辛い当たり様？知るか！

めだかと違って、殴られても許してあげるほど私は優しくないんだよ。

一番最初に行った副部長の城南先輩。

勇氣あるなあ、めだかの赤帯見て躊躇無し

「ヒヒ！それにこれうつかりおっぱいとか触っちゃっても不可抗力
ってことでいいんだよな！」

前言撤回。あの人にあるのは勇氣じゃなくて下心でした。

「勿論だ」

はい、天誅。

流石めだかだなあ、相手に技をかけられるどころか袖・襟を取らせ
ることすら許さないとは。

「流石だなめだかさんは。中学生の頃より更に輝きを増している」

キラキラとオーラを撒き散らす阿久根高貴に善吉が呆れる。

本当にコイツめだかのことが好きだよなあ。

正直、キモイぜ。

「なあ人吉くん。人吉くんはどない思う？」

「…別に。あいつは中二で赤帯取得するようなバケモンなんですか
ら。今更何しても驚きやしませんよ」

まー確かにね。めだかと一緒にいたら驚くことすら無駄だと思い知
らされるね！

「ククク、そーかいそーかい。いや実はウチもおんなじ意見でな。
化物言われようと天才呼ばれようと、あのコは“出来る”ことが出来
るだけ”やる”不可能を可能にしとるわけやない。極端な話、あん

なんウチらが普通に歩いとるんと変わらへんで」

『……………』

私も善吉も言葉が出なかった。

凶星…というわけじゃないけど、確かにそうだ。

赤ん坊と大人とを比べると大人の方が圧倒的に出来ることは多い。

けど、かと言って大人が凄い訳ではないのだ。

だって、大人にとっては“出来て当たり前”のことなんだから。

「それに比べたら凡人のクセに天才に付き従バケモンつとうジブンの方がよっぽどスゴイやん。なあ？部活荒らしの人吉善吉くん？」

「……付き従ってるつてのは語弊がありますね。俺はあいつに振り回されてるだけです。生徒会だってムリヤリ入れられたようなもんです」

『えー、「善吉が自分から腕章を寄越せと言って来たのだ！」つてめだかが言ってたよー』

「ち、ちげえ！あれはめだかちゃんか…」

「そうか、無理矢理だとほざくか」

だったら俺が代わってやろうか？

そう阿久根高貴は私達の話に割り込んできた。
曰く、これまではめだかの同情心に免じて見逃してきたが、そろそろ善吉も独り立ちするべきだ、とか。

……阿久根高貴も、あの変態も、てんで分かってないよね。

『資格だとか、すべきだとかで、善吉は私達と一緒にいる訳じゃないっつーの』

「？ いるかさん、何か仰いましたか？」

『イエイエ、別にー』

まあ、大好きな幼馴染みが馬鹿にされてるのは嫌だからね。いつちよ阿久根高貴をぶっ倒そうか！善吉が。

「うん！人吉くんみたいな頑張り屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ」

……拝見、人吉瞳先生。

どうやら善吉にも春が来たようで「何を言っただよいるかちゃん！」

『大丈夫だよ善吉。猫美先輩なら君の努力を認めてくれるさ』

「そついう問題じゃねえから！」

……そついえば、長年一緒にいる私だけど、善吉の好みのタイプは知らないな。

今度聞いてみよう。

「ほんだら、ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根クンに十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや、人吉クン！」

：んー、そうは言ったものの、柔道経験なんか零に近い善吉と阿久根高貴じゃ勝負にならないよなあ。
善吉がどう出るのかが見物ですな

バンツ！

先手必勝と組みに向かった善吉だけど、阿久根高貴に綺麗に投げられ受身すら取れずに畳に叩き付けられてしまった。

『うわぁ……あれは痛い』

背中から地面にぶつかるのと口から内臓出るような痛みに襲われるよねー。

しかも、あと九本（善吉が阿久根高貴に簡単に勝てるとは思ってない）って……。

「あーさっすが阿久根クン。綺麗な一本やなー。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。……ホンマ天才的でつまらん柔道や」

いつの間にか隣には猫美先輩が。審判やってたんじゃないのか 안타。

『相変わらず天才嫌いですね、猫美先輩』

溜め息を吐きながら言つと先輩はおちゃらけながら、

「うん、嫌いやで。大嫌いや。黒神ちゃんのこと阿久根クンのこともな。あ、いるかちゃん友達やからノーカンやで？」

と私の頭をクシャクシャと撫でた。

「なるほど、流石柔道界の反則王は言うことが違う。あといるか姉を撫でるな」

むっ。めだかに抱き寄せられた。この子は相変わらずの嫉妬しいだな。

「ま、黒神ちゃん。天才は天才同士、凡才は凡才同士でつるもやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんなし人吉クンくれや。取り替えっこしよーで」

……これで九本。

阿久根高貴もめだかのことになると容赦も手加減もないよねえ。

「ふむ、ならば安心しろ鍋島三年生。天才などいない」

「……は？」

「いやいや、めだかは充分天才だよ。天才過ぎるくらいに」

「む、そんなことはないぞ。私はただ良い運と環境の中、努力して来ただけだ」

『えへへー、じゃあ秀才つてところかな？』

……天才はいるんだよ、めだか。

努力で分身出来たり、フルマラソンを二時間で走れたり、書の道を三ヶ月で極められたり、十四歳で赤帯取得出来たり、猛獣を屈服させられたり、関数計算を暗算で出来たり、するわけないじゃん。

いや、もしそれを努力で片付けたら、出来ない人は努力が足りないってだけで終わっちゃうんだよ。

間違いなく天才は存在する。

それがどんな基準で判断されるかは私の知ったことじゃないけどね
↓

「善吉！」

「ん？」

いきなり叫ぶめだか。フラフラな善吉に激励の一つでもあげるのかな？

「いつ如何なる場合においても、決して私は貴様に負けるなどとは言わん。だから勝って！貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ、困るぞ、泣いちゃうぞ！」

「あーっ、もうっ……。お前が泣くところなんか見たことねえし、見たくもねえよー！」

善吉はそう声を挙げたかと思うと阿久根高貴の膝を両手で刈った。
……リア充めが、爆発しろ。

『まあ、阿久根先輩の思いより善吉の思いが強かったってことですかね』

人間の想いって強いなあ。

無意識の内にふっと口角が上がったような気がした。

番外編：黒神兄妹（前書き）

セエエエエエエッフウウウ！

投稿したで！

短いけど許してください。

イナストがやりたいんです…イナズマイレブンが……

番外編：黒神兄妹

『めだかー、お勉強教えてー』

「……いるか姉、抱えてる物がゲーム機だぞ」

あれは、私とめだかが六歳で姉ちゃんと変態が七歳と八歳の頃の話だ。

いつも通り、屋敷でのんびりまったりしていた私達を変態こと兄貴は甘ったるい声で呼んだ。

「いるかちゃん、めだかちゃん」

……大抵、兄貴が私達をセットで呼ぶ時はマトモな用事じゃない。いやね、兄貴がマトモなこと言うなんてありえないんだけどさ。

『……先週は抱き枕作るからって胸とか計られたね』

「……先月はアルバムを作ると写真を散々撮られたな」

めだかとアイコンタクトを取る。

私達が出した結論は、

「『行かなくて良いか』」

放置であつた。

「いやいや！お兄ちゃんを無視するような子に育てた覚えはないよ

!？」

「育てられた覚えありません」

『お兄ちゃんと認めたくないです』

私達が声を揃えた瞬間、どこからか出てきた兄貴。聞こえてたのか。

兄貴はその両手にケーキの乗ったお盆を持っていた。

苺のショートケーキとモンブラン、それからチーズケーキ。

兄貴は甘い香り漂うそのお盆をこちらに差し出して言った。

「くじらちゃんと食べて来なさい」

と。

というわけで、私達は短い短いお使い（家の中だけ）に出ることになった。

といっても、所詮は家。

いくら広くても別に問題もなく、姉ちゃんの引きこもる部屋に着いた。

「姉さま」

「…何だよ、ここには何の玩具も無いぞ」

呼びかけても、姉ちゃんはノートから目を話すことなく対応した。

どうやら、私達がノックも無しにいきなり部屋に入ったことを咎める時間よりも勉強する方が大切らしい。
相変わらず勉強熱心な姉である。

『兄貴が三人で食べるって』

そう私はお盆を見せた。

姉ちゃんはチラリと私達を見たが、すぐに視線を戻した。

「…要らねーよ。俺の分もやるから二人で食べな」

あ、勉強の邪魔だから外でな、と姉ちゃん。
シッシと犬猫を追いやるように手を払われた。

『…姉ちゃんが食べないなら、私も食べない』

「私もだ」

「はあ？何言つてんだよお前等」

呆れたように、いや実際呆れてるんだろう姉ちゃんは回転式の椅子を回しそこで初めて俺達に体を向けた。

「……………」

『……………』

「……………」

ジッと二人でお盆を見つめる。

食べたいなあ、私はモンブランが良いなあ、と思考がグルグル頭の中を巡るけど、姉ちゃんが食べないなら私もお預けだ。待てをさせられる犬の気持ちがあった様な気がした。

グウと小さくお腹が鳴った。

そういえば、今日は朝から何も食べてなかったんだっけ。

……ちよつとだけなら、と手を伸ばし 駄目駄目！姉ちゃんが食べないのに私が食べる訳にはいかん！

「……………」

『……………』

ああ、でもなあ…………。

美味しそうだなあ、モンブラン…………。

「ケツ、あーもう分かったよ！」

「『！』」

「俺は余ったので良いから早く好きなを選びな！」

「『…はい！』」

勿論、この後三人でケーキを食べました。
兄貴？知らない！

第十一箱（前書き）

うーん、中途半端な仕上がり

第十一箱

『……暇だなー』

どうもこんにちは、化け物生徒会長の双子の姉こと黒神いるかです。授業を行う先生も、一緒にお喋りするようなクラスメートもいないので、私は今ものっすごい暇です。いつも通りだけどさ。

『めだかは校内清掃、不知火と善吉は授業中だしー。何か暇潰しになるものは』

視界に映ったのは

『…そういえば、あんなのあつたなあ』

時計台でした。

理事長室曰く、フラスコ計画は箱庭学園の地下に広がる研究施設で行われているらしい。

それで、時計台の一階がその地下研究施設への唯一の入口だとか。本来私は面倒は嫌いんだけど、今日はあまりにも暇過ぎるし？フラスコ計画とやらに勧誘されたから見学する権利はあるし？ちよつとした暇潰しになら？行ってあげないこともないよ？

『（まあ、あの包帯グルグル巻きの人が気になるってのが本音なんだけどね）じゃ、行きますか』

「「いらつしやいませ」」

という訳で、やって来ました時計台。

しかしながら待っていたのは気になるあの人ではなく双子の男子生徒。

なんだか、簡単には通してくれなさそうだ。

『フラスコ計画の見学に来ましたー。あなた方は門番何かで？』

しかし双子の門番は「無視して素通りしていつてくれて構わないよ」と阻む気は無い様子。にしてもソックリだなあ。やっぱり双子って普通そうなのかな？私とめだかは全然似てないんだけど。

「……ちよつと、聞いてる君？」

『ん？ああ、すみません』

聞いてませんでした、と反省も後悔もしてないけれど一応形だけは謝罪しておく。

双子は溜め息を吐きながらももう一回言ってくれた。

「「この拒絶の扉を通ることが出来たら時計台地下へ入っていいよ」

」

「六桁の暗証番号を正しく入力すればこの扉はあっさり開く」

「一度に通れるのは一人ずつ！一人通る度に番号は変更される」

「「通れる確率は百万分の一！百万人に一人しか遠さない！故に拒

絶の扉！」「

…長い説明ご苦労様ですこと。

この双子はあれなのか？登校義務が無い十三組に入ったのに、この扉の説明をするためだけに一日中ここに立ってるのか？

理事長も中々に良い性格してるな、流石不知火の祖父だわ…。

『…十三組の十三人とやらは毎日それをクリアしてるんですか？』

「勿論！」

「その程度の確率もクリア出来ない人間はフラスコ計画に関わる資格すらないのさ！」

どや顔でそう言う双子。

くっ、一発殴りたい。

言っても始まらないから拒絶の扉とやらに手を伸ばしてみる。

…そういえば、あの人ならこんなの簡単に出来そうだな！。

めだかも朝飯前だろうけど、あの方は夜食前って感じ？

今何してるんだろ、あの人。一応受験生の筈だけど。

ガコンッ

『あ、開いた』

「「！」「

『んー、じゃあ行きますか』

異常者の巣窟にね。

『おー、迷路かー』

早速、地下一階に下った私。

え？エレベーター？エレベーターなんかに乗ったら暇潰せないじゃん。

にしても迷路ねえ。

異常者の研究のための施設で何で迷路？侵入者が二階以降までに行けないようにかな？

……攻略として左手法なんかは時間が掛かる。トレモー・アリゴリズムは目印を付けられるものが無いし面倒だ。

じゃあ、やっぱり……

『八回つてとこだね』

グルグルと腕を回す。本当この能力って便利だよねー。

という訳で、邪道だけど

『正面突破と行きますか！』

目の前の壁の耐久の境界をちょっと弄って壁をぶっ壊す。

『あれ、やり過ぎたかな？』

力を込め過ぎて、五・六通路分くらい穴をあけてしまった。力加減が難しいなこれ。

リッパー・サイクロトロン
廻天

HUNTER×HUNTERのキャラクター、フィックスの能力である。

簡単に言えば、腕を回した回数分、パンチの威力が上がるといいう何とも加減が難しい能力だ。

さて、じゃあ行きますか 「テレビアン！」

『！』

速い。いや、早い。

全く気配に気付かなかった。

確かこの人理事長室にいた人だよな？

あからさま日本人じゃないんだけど……。

「俺は高千穂仕種って言うんだけどよ、いやいや黒神姉、凄まじいぜお前！」

『…ちよつと怪力なだけですよ、高千穂先輩。』

うーん、マズイなあ。

別に戦うのが嫌いな訳でも苦手な訳でも無いけど、あんまり痛いのは嫌だ。

この人良い体つき（えっちな意味ではないよ）してるし、苦戦しそうだな…。

「あ、言つとくけど別にお前の行く手を阻むだとかそんな気はねえぜ」

えっ。

『そうなんですか？』

「次の十三人パーティーの候補なんだろう？好きなだけ見学していけば良いじゃないか」

何だ、案外良い人じゃないか。

ドレッド頭に大量のピアスしてるから不良か何かだと思ってたや。

『それじゃあ、行かせてもらいます。失礼します』

先輩の言葉に甘えて背中を向ける。が、

「ただし、お前の能力には興味がある！」

バギッ！

殴られた。

第十二箱（前書き）

短い！しかし終わった！

第十二箱

『つてて……』

不覚にも背後からの攻撃を喰らってしまった私。

ダメージはそこまででもないけど、制服が汚れちゃったよ。めだかと違って、私は今着てるこれと冬服しか持ってないんだから、止めて欲しいな。

「…マジかよ。こちとら殺すつもりでやったんだぜ？流石化け物生徒会長の姉だな、黒神いるか！」

『…妹の方がよっぽど異常ですよ。で、何でしたっけ？私の能力？教えれば通してくれるんですか？』

制服についた土埃を払いながら、化け物を見るような瞳で私を見る高千穂先輩に返す。

あー、結構ひどいなー。めだかに怒られるかも。

「…ああ、そうだ！一応俺は研究者なんでな、弾丸を避けることなく避けたお前の能力に興味がある！」

『能力なんて大袈裟なもんじゃないですよー。運良くあの先輩が外してくれただけです』

「宗像がそんなことするわけねーだろ。アイツの異常性はアフノーマル殺人衝動だぜ？」

『…ふーん』

その割りには理事長室で喰らった（喰らってないけど）銃弾は頭や胸をわざと外してるように感じたけどね…。

『というか、私の能力は科学的にも論理的にも解明されないものですから、研究者でも理解出来ないと思いますよ？』

他の人が持っているモノが人より異常であるという異常者の皆さんアブノーマルと違って、私のは純粹な能力。

宗像先輩の殺人衝動や人に言うことを聞かせる（私の憶測だけど、多分電磁波を発する力が人より強いとかそこらへんだと思う）電波な人の異常と違って、私の能力でありノットモノクロは誰も持っていないからね。

人を殺したいと思うことは誰でもあるし、電磁波は人間皆出している。

けど、境界を弄る能力なんて皆が皆持ってたなら世界破滅するっつの。

「そうかいそうかい。ちなみに、お前のその能力っていうのは教えてもらえたりするのか？」

『別に隠すほどのものじゃないですから。私は境界を弄ることが出来るんです』

ありとあらゆる境界を。人と獣の境界を。人と家畜の境界を。人と神の境界を。人《普通》と化け物《異常》の境界を。人と人の境界を。好きな時に好きなところを好きなものを好きな具合に操る。

『それが私の能力です』

「…おいおい、それは人間の領域じゃねえだろ」

えーそうかな？

私なんかより球磨川やめだかの方がよっぽど異常でよっぽど化け物でよっぽどズルいと思うけどね。あの二人チート過ぎ。普通力ワイソス。

で、能力を教えたんだから通らしてもらっていいですか？そう先輩に質問するが、先輩の答えはノーだった。

「ってことはだ！お前なら俺と喧嘩《殴り合い》出来るんだろお！？」

『うわおう』

私に向かって拳を振りかざす高千穂先輩。

勿論受け流す。

しかし、今度は左足が私の頭目掛けて向かって来る。

『つと、ちょ、あぶな』

受け流しても、受け止めても、次々に高千穂先輩は攻撃を繰り返す。危ない、危ないって！

「どうしたよ黒神いるかあ！反撃しねえのかい！？」

『じゃあ、お言葉に甘え…てっ！』

ひよい

『……ありや？』

思いっきり力を込めて先輩の顔面に拳を打ち込もうとするが、簡単に避けられてしまった。

確かに私はあんまり戦えるわけじゃないけど、いくらなんでもこんなキツイ体制から避けるのは無理がないかい？

「（何だ、こんなもんかよ黒神…）おらあ！」

『つとと…もしかして、高千穂先輩の異常^{アブノーマル}つて反射神経だったりします？』

「ご名答！俺は生まれつき異常で過剰な反射神経の持ち主でな言うならば自動操縦の戦闘機だ！」

うわぁ…マジかよ…。

戦いのための異常みたいなもんじゃん。真っ向勝負で敵うわけくね？

んー、殴り合いしたい高千穂先輩には悪いけど、ちょっとズルい手使わせてもらおうかな。

『大人と子どもの境界』

「ん？何を言つて　なっ！」

ちよつとばかり高千穂先輩には若返ってもらった。五歳つてところかな？

生まれつき異常な反射神経でも、攻撃力が低いんじゃ避けるだけだしね。

『私は戦うタイプじゃないんで 先行かせてもらいますね、高千穂先輩』

「…今度は逃がさねえぞ」

『やだなあ、そんな怖いこと言わないでくださいよ。それに』

アナタの相手は今度来るであろう私の可愛い妹に任せますから。

そう言って私は今度こそ高千穂先輩に背を向けて地下二階に下った。

アンケート（前書き）

大して重要な話ではありませんが、良かったら

アンケート

めだかボックスの11巻が発売されましたね。

それに便乗、という訳ではありませんが伴って、アンケートを行いたいと思います。

簡単に言えば、この連載の落ちを誰にしようかという事です。

勿論、皆さんと同じで作者もめだかボックスに登場するキャラクタ
ー皆大好きですし、主人公と絡ませたいのですがいかんせん人数が多すぎまして。

ハーレムにしてもせめて10人以下には絞りたいのです。

ルールというか規約は以上です。

- ・めだかボックスのキャラであること
- ・女性であること
- ・複数キャラへの投票も可
- ・しかし、一人のキャラに何回も投票するのは不可
- ・期限は今この時から三週間とする
- ・もし、そのキャラとこう絡ませたいこんな関係にしたいというのがございましたら一緒に記入を。出来る限りお答えしたいと思います

もしよろしかったら、感想にて好きなキャラを挙げていつてください。

P
S
・書子ちゃんだけは絶対書きます。異論は認めません。

第十三箱（前書き）

すみませんっしたあ！！！！

久しぶりに書いた挙句、駄文と言う……。

いや、いつも駄文だけどさ。今回は特に酷いです、はい。

第十三箱

『地下で日本庭園つて一体…』

地下二階に下った私が見たのは日本庭園。
こらまた随分と意図がわからないなあ。

空調やらを調えるだけでもかなり大変だろうに。

「ん？客人か？」

『…どうやら一階ごとに1人住人がいるみたいですね』

日本庭園には似つかわしくない服装をした正直見た目不良中の不良の男の人。

十三組の十三人の内の一人っばい。

「ああ、理事長室が言ってたやつか。運が良かったな、今私は機嫌が良いから通らせてやる。先に行きな」

『…いやあ、十三組の十三人の皆さんの意見を鵜呑みにしたら痛い目見るっばいんで遠慮します』

先に行くように顎をしゃくって促す先輩だが、そうは問屋が卸さないぜ。

めだかと違って私は疑うよ？私が信じるのは善吉とめだかと、…今はいないけど姉さんぐらいだもん。
えっ、兄貴？誰それ？知らんな！

「かーっ！今時の一年は先輩の言う事も信じないのか。世知辛いねえ」

『えへ、そこまで馬鹿じゃないですよー。ところで自己紹介と行きます？』

「にひひひひ！化け物生徒会長とは違うってか！私は糸島軍規だ、ここ地下二階を担当している。仲良くしてね」

『化け物生徒会長の姉こと黒神いるかです。仲良くするつもりはありません！』

ズバツと言いつ切る。だってこの人何か纏ってる雰囲気既に怖いんだもん。

「冷たいこと言うねえ。だがまあ！さっきも言った通り私は今機嫌が良いんだ。早く通れよ」

『……はあ』

どうやらその言葉に嘘偽りはないらしい。機嫌がとても良さそうである。…良い歳した男が鼻歌歌うってどうよ。

『じゃあ、先に行かせて頂きます』

そう私は階段に向かって　　って。

『…何で着いて来るんですか』

「ん？そりゃあ暇だからだろ」

私の後ろにぴったり着いて来る糸島先輩。

ちよ、十三組の十三人ってこんなテキトーで良いのか。……テキト
ーだから十三組の十三人なのか、理解。

「あー、忠告してやるよ黒神。三階はなあ、十三人の中で最強の女
の担当フロアだ！注意しておいた方が良いぜ？」

『最強の女？』

えー、こんな早くからラスボスみたいなの出る普通？しかも何で地
下三階なんだよ、中途半端な。

「そうそう。作られた異常で……つと、湯前か」

『え？』

「あー糸島先輩じゃないですかー？どうしたんですか、こんなところ
でー（棒読み）」

『どわっ！』

会話していた私達の目の前に現れた、なんかもうワガママボディと
いうか唯我独尊ボディな女の子。胸が零れてらっしゃる……。き、
気にしてねえし！

「んー、ところで誰ですかーこの子？」

「ああ、理事長が前言ってたろ？十三人の候補だったよ」

『…黒神いるかです』

ヤバイ。これは善吉だったら鼻血出して死ぬレベル。何でこの人裸なん？何で下着無しで直にオーバーオールなん？某配管工の赤いあの人のファンなん？

「…………可愛い」

むぎゅっ

『ぐむっ！』

何かいきなり抱き締められたよ。何かめっちゃ頭撫でられてるよ。死ぬ。胸で死ぬ。くそっ、めだかと言いい猫美先輩と言いいこの人と言いい箱庭学園巨乳多すぎだろ理事長の趣味かよ。

いや、冗談無しで死ぬって。息出来な…………い。

「その辺にしてやれ。死にかけてるぞ」

「わーごめんねー（棒読み）」

『し、死ぬ…………』

やっと解放された私。良かった。
流石に死因：胸部による窒息死は嫌だ。

「コイツは湯前音眼。私と同じ十三人だ」

「仲良くしてね」

『…よろしく願いします』

すつつつこい遠慮したいです。しかし、それを口に出さない私を誰か褒めて欲しい。

「ところでお前は七階担当だろ？何でこんな中途半端なところにいるんだ？」

どうやら湯前先輩は七階担当らしい。

後ろから私に抱きつき、そのけしからん胸を押し付けてくる湯前先輩。ガムを膨らませながら言った。（どうやって膨らませながら喋っているのか…謎である）

「んー、理事長から呼び出し受けちゃってー（棒読み）」

『あのエレベーター使えば良いんじゃないですか？』

七階から二階までとか面倒だろうに。何とかの扉（名前忘れた）を入って直ぐのところにあったあのエレベーターを使えば良いんじゃない？

けど、私の言葉を先輩二人は否定した。

「あのエレベーターは地下十三階から一階まで直通だから、移動は基本階段なんだー（棒読み）」

「それに、十三組の十三人の全員が使えるわけじゃないからな」

えっ。使えないなら存在する意味無くない？

「いや、使えるのは私と湯前を含めた六人…裏の六人と呼ばれているメンバーと雲仙だけだ。それ以外の十三人は開けることすら出来ない」
プラス・シックス
バーティ

ちなみに十三階は都城が担当しているぞ、と糸島先輩。都城って誰だよ。というか、十三階まで直通のエレベーターを十三階の担当者が使えなかったら意味無いじゃん。結局存在してる価値無いじゃん。

「偉大なる王に扱えぬ物など無い」ってパスワード入力して結局駄目だったんだよねー、都城先輩（棒読み）」

「にひひひ、あれは傑作だったな」

うわぁ悲惨だわぁ……。ちょっと見てみたかった気もするけど。

「じゃあまたねー」

後で七階にも来てねーと台詞を捨てて湯前先輩は上に行ってしまった。あの人、理事長まであの格好で行く気か？……まさかね！

『えーっと…何でしたっけ、地下三階の人。十三人最強の女？』

「ん？ああ、そうだ。補足するなら、お前が倒したであろう地下一階の高千穂は十三人最強の男だ」

……もしかして、これから出て来る十三人全員そんな肩書きがあるわけじゃないよね？十三人最凶の男ーとか十三人最怯の女ーとか。流石にちよつと勘弁してくれ。

「と言っても十三組の十三人に戦闘タイプの子がいないからなあ」

『へー。どんな人がいるんですか？』

「十三人最強の古賀だろ？頭脳労働専門の名瀬だろ？体を液体にする湯前だろ？髪の毛伸ばせる筑前だろ？あと、何でも食べれる上峰だな」

あー確かに戦闘向きではないなあ。

いやまあ、女子で戦闘向きってのもどうかと……って上峰？

『上峰って…あの上峰ですか？』

「どの上峰かは知らんが、上峰書子。私のクラスメイトで、あのエレベーターを使えるやつの一人だ」

『m j k』

m j kと書いてマジかと読む。じゃなくて書子たん箱庭学園に入学してたのか、初めて知った。

まあ、確かに書子たんぐらいの異常を理事長が勧誘しないわけないか。
アブノーマル

……実際、私が箱庭学園に入ったのも理事長から勧誘されたからだしね。

「何だ、上峰と知り合いか？」

『中学の頃にお世話になったんですよ』

主に勉強面で。

と、そんなこと言ってる間に地下三階か。結構長いな。

「心して挑めよ黒神？さっきも言った通り、十三人最強の女の担当フロアだ！」

『分かってますって』

茶化す糸島先輩を余所に、重苦しい扉に手を掛ける。
扉を開けたらそこは

『…アニマルパライス？』

動物園でした。

第十三箱（後書き）

「偉大なる王^{おれ}に扱えぬ物などない」自信満々でパスワード入力

ブーッ！パスワードガチガイマス

「ほ、ほら、王土！王土の前ではエレベーターすらも屈服して機能を停止しちゃうんだよ！」必死でフォローする行橋

「あんだけ自信満々だったのに……ぷっ」クスクス笑う裏の六人

まで妄想しました。

十三組の十三人は仲良しだと良いなあ。

結果発表

×切をすっかり忘れてていました。

早速ですが、この小説『黒神いるかの転生生活』のお相手、所謂落ちが人気投票にて決まりましたので発表いたします。

アンケート下位から発表させていただきます。

七位：希望ヶ丘水晶

不知火半袖

財部依真

与次郎次葉

鰐塚処理（同数一票）

六位：筑前優鳥（二票）

五位：志布志飛沫

平戸ロイヤル

雲仙冥加（同数三票）

四位：古賀いたみ（四票）

三位：赤青黄

湯前音眼

江迎怒江（同数五票）

二位：大刀洗斬子

黒神めだか

安心院なじみ（同数六票）

1位：黒神くじら（七票）

という訳で、黒神くじらを中心に話を進めていきたいと思っています。

平戸ロイヤルに投票した人は後で職員室に来るように。

数多くの投票、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860v/>

黒神いるかの転生生活

2011年9月7日18時35分発行